Stairway To The Stars
星へのきざはし

New York Trio
ニューヨーク・トリオ

1. 恋人よ我に帰れ
Lover Come Back To Me《S. Romberg》(6 : 13)

2. 星へのきざはし
Stairway To The Stars《M. Malneck , F. Signorelli》(5 : 31)

3. 木の葉の子守歌
Lullaby Of The Leaves《B. Petkere》(6 : 34)

4. 煙が目にしみる
Smoke Gets In Your Eyes《J. Kern》(6 : 38)

5. アイル・ビー・シーイング・ユー
I'll Be Seeing You《S. Fain》(2 : 06)

6. キャント・ヘルプ・ラビング・ダット・マン
Can't Help Loving Dat Man《J. Kern》(4 : 58)

7. ボディ・アンド・ソウル
Body And Soul《J. Green》(7 : 00)

8. ザ・マン・アイ・ラブ
The Man I Love《G. Gershwin》(7 : 13)

9. スリーピング・ビー
A Sleeping Bee《H. Arlen》(6 : 16)

10. 星影のステラ
Stella By Starlight《V. Young》(4 : 34)

ビル・チャーラップ Bill Charlap《piano》
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart《bass》
ビル・スチュワート Bill Stewart《drums》

録音：2004年11月11&12日 アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

Ⓟ Ⓒ 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at Avatar Studio in New York on November 11 & 12 , 2004.
Engineered by David Darlington, Mixed and Mastered by
Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover Photo : © Paul Foldes / G. I. P. Tokyo.
Artist photos by John Abbott. Designed by Taz.

目下ニューヨーク派のピアニストで乗りに乗っているのがビル・チャーラップだ。1966年生まれの彼だから、キャリアはすでに十分積んできた。しかし、長いこと過小評価に甘んじ、ようやくメジャーのブルーノートから作品を発表したのが2000年である。

ところがそれ以前から、目ざといファンはチャーラップのことを注目していた。とくに日本のファンの関心度が高かったことは誇っていい。わが国のヴィーナス・レコーズが彼のリーダー作を制作したのは1998年のことだ。この時点で、すでにそのプレイは知るひとぞ知る存在になってはいた。しかし、まだ一般的にはほとんど誰も彼のことなど気にも留めていない時代である。

ヴィーナスがチャーラップに着目したのは、何度かレコーディングをしたことのあるフィル・ウッズのサジェスチョンによるものだった。彼のグループでピアノを弾いていたのがチャーラップだ。ウッズの推薦でチャーラップのリーダー作が誕生したのである。その『ス・ワンダフル』は、発売されるやファンの間で大きな評判を呼ぶことになった。

そうこうしているうちに、ライヴのシーンでも評価が定まってきたチャーラップに、ブルーノートからレコーディングのオファーが舞い込む。ヴィーナスから見れば、何だか横取りされたようなものだ。しかし、先に才能を見抜いた信頼もチャーラップからは得ていたのだろう。ブルーノートでアルバムが制作されるのと平行して、ヴィーナスからは彼が中心となったニューヨーク・トリオによるアルバムが登場するようになったのである。

ブルーノートの作品よりニューヨーク・トリオの作品のほうが好ましい。そう思う日本のファンは多いと思う。それは当然だ。日本のジャズ・ファン、なかんずくピアノ・トリオ・ファンの好みを熟知しているヴィーナスがレコーディングしているのだから。『夜のブルース』(2001年録音)、『過ぎし夏の想い出』(2002年録音)、そして『ラヴ・ユー・マッドリィ』(2003年録音)と、コンスタントに発表されてきたニューヨーク・トリオの作品を聴けば、そのことはよくわかる。

そしてここに、トリオの４作目として2004年録音の最新作『星へのきざはし』が登場した。今回はこれまでとは趣向が違って、スイングジャーナル誌の読者投票を元に、チャーラップが最終的に選曲した10曲が収められている。ここでも、日本のファンに視線を向けたアルバム作りが成されたことは言うまでもない。

簡単にニューヨーク・トリオのメンバーを紹介しておこう。チャーラップは音楽一家の生まれだ。父親のムース・チャーラップは「ピーター・パン」の音楽を作曲したコンポーザーで、母親はコルピックスから『マイ・カラリング・ブック』をリリースしたシンガーのサンディ・スチュワートである。

1966年10月15日にニューヨークで生まれたチャーラップがピアノを習い始めたのは13歳のときで、コンボを結成してバンド活動を開始したのが高校時代だ。ジャック・ライリーとエリノア・ハンコックに師事した彼は、ディック・ハイマンからも大きな示唆を受けている。これまでにジェリー・マリガン、フィル・ウッズなどのコンボで活躍し、1993年には初リーダー作『Along With Me』をキアロスキューロに吹き込み、その後はクリス・クロスでも趣味のいいトリオ作品を残してきた。その後のレコーディング・キャリアについては前記した通りだ。

ベースのジェイ・レオンハートは、1940年12月６日にメリーランド州ボルチモアで生まれている。地元でプロ・デビューしたのが1950年代末のことで、1960年代から70年代にかけては、マイク・ロンゴ、エセル・エニス、アービー・グリーン、マリアン・マクパートランド、トニー・ベネット、ジム・ホール、バーバラ・キャロル、サド・ジョーンズ＝メル・ルイス・ジャズ・オーケストラ、ズート・シムズ、リー・コニッツ、バディ・リッチ、タル・ファーロウ、シルヴィア・シムズ、ジョン・バンチといったひとたちと共演して真価を発揮してきた。しかし、広く注目されるようになったのは1980年代以降である。ヴィーナスからも2004年にリーダー作の『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン～レイ・ブラウンに捧ぐ』を発表していることは、ファンなら先刻ご承知だろう。

ドラムスのビル・スチュワートは1966年10月18日にアイオワ州デス・モインズで生まれというから、チャーラップと同じ年だ。ニュージャージのウェイン大学でルーファス・リードやハロルド・メイバーン他に師事し、在学中にジョー・ロヴァーノと出会う。それを機にプロ入りして、1990年にジョン・スコフィールドのグループに抜擢されたことで注目を浴びたというのがおおまかな経歴だ。この年には初リーダー作の『シンク・ビフォア・ユー・シンク』を日本のジャズシティで録音し、1995年にはブルーノートからもリーダー作を発表している。

アルバムは「恋人よ我に帰れ」で幕を開ける。1928年に上演されたミュージカル『ニュー・ムーン』のためにオスカー・ハマースタイン二世（作詞）とジグムンド・ロンバーグ（作曲）が書いたこの名曲を、トリオは軽やかに演奏してみせる。このタッチがご機嫌だ。チャーラップは滑るようにお馴染みのメロディを綴っていく。そしてそのままソロに突入し、徐々に力強さを増して自分の世界を描出する。バックの２拍子風ベースを弾くレオンハートとブラシで軽快感を維持させるスチュワートのプレイも見事だ。終盤ではこのふたりの掛け合いも登場する。

アルバム・タイトルの「星へのきざはし」は、落ち着いた雰囲気で演奏されるバラード。しっとりとしたフレーズに情感が滲む。チャーラップは、これまでのヴィーナス作品でも好評を博してきたリリカルなタッチでこの曲を優雅に、かつ上品に演奏してみせる。趣味のいいピアノというのはこういうものを指す。その典型とも言えるのがこのトラックだ。

「木の葉の子守歌」はシングル・ノートで低音部を強調したチャーラップのタッチが印象的に響く。ミディアム・テンポでリズミックな演奏にしたのも正解だ。このアイディアによって、多くのひとが取り上げてきたこの曲に新しい魅力がつけ加えられた。チャーラップが主導の演奏ながら、バックのレオンハートが目立つのも意図したものだろう。それもこの曲の特徴になっている。そして、最後は彼が満を持した形でソロを取る

1933年にブロードウェイで初演されたミュージカル『ロバータ』からはふたつのヒット曲が生まれた。ひとつは「イエスタデイズ」で、もうひとつが主題歌となった「煙が目にしみる」だ。ロバータとはこのミュージカルに登場する主人公の叔母さんのこと。“恋は盲目。そのうち振られて泣きをみる。でもわたしは虚勢を張って、「泣いているんじゃない、煙が目にしみただけ」と言うでしょう”。ザ・プラターズの大ヒットでも知られるお馴染みの曲を、ニューヨーク・トリオが極上のバラードとして聴かせてくれる。このテンポで溜めを効かせたフレーズは絶妙だ。触れれば壊れてしまいそうな繊細さ。最高に魅力的な１曲である。

美しくも思索的なメロディを持った「アイル・ビー・シーイング・ユー」は、チャーラップにぴったりのナンバーだ。一般にはミディアムやアップ・テンポで演奏されるが、ここではテーマ・メロディのみがソロ・ピアノで淡々と綴られる。これだけで余韻を十分に残す演奏になってしまうのだからたいしたものだ。

「キャント・ヘルプ・ラヴィング・ダット・マン」はバラードに近いミディアム・テンポでじっくりと演奏される。驚くのは、このテンポでもトリオがスイング感を存分に発揮していることだ。チャーラップのタッチもさることながら、レオンハートとスチュワートがこのテンポでもビートを生き生きとしたものにしていることが理由である。彼らふたりのサポートを得て、ソロ・パートでチャーラップが伸び伸びとフレーズを綴ってみせる。これまた快演と呼べる内容だ。

「ボディ・アンド・ソウル」は1930年にブロードウェイで大ヒットしたミュージカル『3人ひと群れ』のためにジョニー・グリーンが作曲したナンバーである。当初からもっとも美しいラヴ・バラードとの評価を集め、それはいまも変わっていない。ジャズの世界ではテナー・サックス奏者のコールマン・ホーキンスが1939年に録音した演奏が最高の名演と呼ばれている。それを、歌心に優れたセンスを持つチャーラップが、ミディアム・テンポで原曲の持ち味を生かしつつ、個性も存分に発揮してみせる。中盤にフィーチャーされるレオンハートのソロもつぼを心得た素晴らしい内容だ。

今度は一転してアップ・テンポで「ザ・マン・アイ・ラブ」が演奏される。スチュワートのブラシを用いたサポートが軽快感をつけ加えていく。跳ねるようなレオンハートのサポートも効果的だ。彼らのバックアップを得たチャーラップも躍動的なプレイで一気にこの曲を弾き切ってみせる。

チャーラップの優れた表現力に舌を巻かされるのが「スリーピング・ビー」だ。イントロでまずは聴くものの心を捉え、イン・テンポになってからのテーマ・パートでさらなる満足感を与えてくれる。そして、ソロ・パートでは圧倒的な表現力を披露する。それにしても彼は上手い。その上で表現力にも長けている。現在のシーンを見回して、同世代でこれだけのピアノが弾けるひととなると、すぐには名前が思いつかない。それほどの才能の持ち主であることを、改めて確認させてくれるような演奏だ。

アルバムのクロージングとなった「星影のステラ」は、映画『呪いの家』の主題曲としてヴィクター・ヤングが1944年に発表したナンバー。このときは映画音楽としてのもので、歌詞はついていなかった。人気作詞家のネッド・ワシントンが、このメロディに“こまどりの歌、夕暮れのせせらぎ、それは偉大なシンフォニー、そして思い出すのは星影のステラ”という印象的な詞を乗せたのはそれから２年後のことである。そしてもちろんこれによって、この曲は大ヒットとなった。それをニューヨーク・トリオは情感たっぷりの演奏にしてみせる。

[(c)WINGS 04122235：小川隆夫/TAKAO OGAWA]